闇の向こうの君へ

四つ葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闇の向こうの君へ

【Ｎコード】
Ｎ１０８８Ｌ

【作者名】
四つ葉

【あらすじ】
残忍な闇の術師と人を助ける光の術師
シャイリス国の殿下とその仲間と闇の術師の物語

第一章（前書き）

誤字脱字・・・
意味のわかんない言葉の数々が
多々あると思います。

よろしくお願いします

第一章

森はひんやりとしており、人の気配など一切しない。
木々が生い茂り人が手を加えた様子がない。
ここまで来れば何とか大丈夫だろう。

辺りは少しずつ明るくなってきた。
夜がもうすぐ明けるのだろう。
もうむやみに動かない方が得策だ。

今日はこの辺りで野宿でも・・・
と思った時目の前に小さいが小綺麗な小屋が建っていた。
いったい何でこんな所に小屋など建っているのだろうか？

近づいて見るとキチンと整備されている。
定期的に手入れをしているらしい。
だが、中には誰もいなくドアには鍵がかかっていた。

運が良かった。
今日はここで休もう。
小屋に寄りかかり、目を閉じた。

光が差してきた。
朝が来るようだ
森の中は思っていたより光が差す。
太陽が天辺に来たらさすがにしんどいだろう。

その時、急に光が途切れ私の身体にフカフカしたものが当たった。

目を開けてみるとそこには大きな黒い山犬のようなモノが私の上に覆い被さってる。

「サンかぁ・・・久しぶりだね」
山犬のようなモノは私から離れて私の前に立った。
「久しいな・・・こんなところでなにをしている？沙桜」
低い声。身体全体に響く。相変わらずだな
「少し事情があってね。あの国にいられなくなっただけだよ」
澄んだとても美しい瞳が此方に向けられた。
「フッ・・愚かな人間どものせいか？」
辺りはもう明るい。木々が輝いている。

「クス・・どうだろうね？」

私はサンの毛並みにふれた。
サンは嫌がる様子もなく私にそっと近寄ってきた。
「まぶしいだろう？もう朝だからな・・・」
サンはまた私に覆い被さった。
とても温かい。
「サンは何でこんな所にいるの？」
サンの毛並みはとても美しい。
闇色の毛並みはうっすらと光に照らされていた
「沙桜が国を出たの聞いてな・・・」
優しい口調だった。心配してくれたらしい
「情報早いね。あそこでなら上手くやっていけそうだったんだけどね」
今思うと懐かしい。あの街並み、もう戻れることは無いのだろう

サンは何にも言わなくなった。
私は静かに眠りにつく。何日も睡眠を取っていなかったし、

サンに会って安心できたからであろう。
日は昇りサンと私を照らし始める。

どのくらい眠ったのか、遠くで人の気配がする。
私と少々離れた場所にいるサンもそれに気づいているようだった。
「人が来るな・・・2，3人というとこか・・」
サンがつぶやいた。
日はもう高くなっている
「どうするんだ？私の背に乗せてやろうか？」
サンはここから離れた方がいいと判断したらしい。
確かにサンの背に乗せてもらえば、今近づいてくる人間に会わなくて済むだろう。
サンは心配そうに私を見ている。
「私はここにいるよ。逃げてばかりいては、次の住処が見つからないだろうしね」
サンは人の気配がする方向を見た。
「・・・・人間と共に暮らすという考えしかないのか？」

私はサンを見た。
「闇にはもう戻れないよ。争う気はないんだ」
私は争う勇気などない。
「・・そうか」
サンは静かに私に近づいてきた。
「私は少し離れていよう。私がいない方が都合がいいだろう」
そう言うと、森の中に消えていった。

人の気配が近づいてくる。

3人か・・・・
嫌な気配などはしない。
族の類ではないだろう

私はフードを深く被り顔を隠した。

「やっぱり、小屋を直しておいて正解だったな」
「その分の経費をまだもらってないんだがなぁ」
男が2人と女が1人か
まだ成人したかしないかくらいかな？

身なりは良い
男の1人が私に気が付いたようだった
「おい、そこの。ここで何をしてる？」
完全な上から目線
身分が高いか・・・
金持ちか・・・
これでは、国を出た意味がないのではないか？という考えが頭に浮かんだ。

私は顔を下に向けたまま何も言わなかった。
何かいった方がいいのだろうが、何を言えばいいのか思いつかなかった。

「聞いているのか？」
また同じ男が言った。
3人はだんだんと私に近づいてくる。
男の影が私を包む
男は断り無しに私のフードをはらった。

黒髪が広がった。闇色の髪が・・
しょうがなく顔を上げると男達は驚いた顔をした。
まぁ、無理もないのだが

「お前、闇の術師か・・・」

男はつぶやいた。
男の顔には恐怖の色はなかった。
後ろの2人は何か言っている。

私の瞳は血の色をしている。
左頬には黒い紫色の魔法陣のようなものが彫ってある
そして闇色の髪

その3つは闇の術師の印。
私は人間ではない

男は私を見ていた。
何を考えているのか・・・
わからない

「名は何というんだ？」
男は私に尋ねた。
どうしてこんなに上からものを言うのだろうか？
どの世界でも変わらないことなようだ

「自分から名乗るのが礼儀なのでは？」
私の口はそういっていた

男はまた驚いた顔をした。

そして笑いながら言った
「それは、失礼。私の名はルートだ」
後ろの2人も笑っていた。
何か変だったのだろうか？

「それで、名は何という？」
男は、否ルートはまだ笑っていた。
「アイル・・・」

私はそう答えた。
あの国で使っていた名前だった。
術師の名を言う気はなかった

「アイルか・・・人間の中で暮らしているのか？」
ルートは私の前にしゃがみ込んだ。
「そうしてる」
ルートの顔を見るとルートと眼が合った
「このシャイリス国でか？」
男は私の目を見たままだった。

この人は頭がおかしいのだろうか？
何故私の眼を見れるのか・・・

「依然は隣国のアイリンに・・・今は住むところ探していて・・」
私は後ろも2人を見たが2人はただじっとこちらの様子を見ているだけだった。

「そうか・・・・この国で暮らす気なのか？」

何なのだろう？

この人は？

「住めそうな所があれば・・・・」
男は突然立ち上がった
私は少しビックリした

「話したいことがある。ここで話すのもなんだから中に入ろう」
男は後ろの２人の方を向いた
２人も納得しているようだ
どうやら、ルートの方が身分が上のようだった。

私は、言われた通りに中に入ることにした。
森の中とはいえ、やはり日差しがすごい
屋根があれば少しは楽になるはずだ

中はとても綺麗にされていた
私が住んでいた所より設備がよい
モノの良さそうなソファーにテーブル
可愛らしい暖炉や小さいがキチンとした料理場もあった
３人は馴れた様子で入っていく

ルートはソファーに座った
だが他の2人は座ろうとせず、壁の近くに立ったままだった
ルートに座るよう勧められ私はルートと向かい合うかたちで座った

「あぁ、後ろの2人は私の友人でカインとシュラだ」
振り返ると2人がお辞儀をした
名前からして男の方がカインで、女の方がシュラなのだろう
私は迷いながらお辞儀を返した

私はこの状況がよく分からなかった。
あの2人は使用人なのかと思っていたら友人だと言うし、
だが友人だとしたらこの態度の差は何なのだろうか？
そんなことを考えていると
「城で働く気はないか？」
ルートは突然言った
手を前に組み、私を見上げていた
私は愕然とした
どこに行っても変わらないんだと
サンの言うことをきけばよかったと後悔した

「あなたはお城の人なの？」

ルートは、少し何かを迷いながら

「お城の人か・・・　私は王の息子だよ」

口調を変えずサラッと言った

私は信じていいのか分からなかった

本当だとしたら私は相当運が悪い

こんな偶然があっていいのか

思考が停止してしまうかと思った・・・・

外から小鳥のさえずりが聞こえた

「私に断る権利はあるの？」

声が震えているのが自分でも分かった

私は今どんな顔をしているのだろうか？

ルートは目を見開いた

「断ってほしくはないが、無理強いする気はない」

ハッキリとした口調だった

私ははっと顔を上げた。

思いも寄らない返答だったからだ。

「・・・そもそも、初対面の術師にそんなこと言っていいの？」

ルートは真っ直ぐに私を見つめた
綺麗な眼だと思った
「本当に危ない術師だったら私達は今頃命はないだろう？会ったのがアイルで良かったよ」
優しい口調だった
確かに私じゃない闇の術師だったら死より恐ろしいことが起こっていただろう
だが、術師を簡単に信用するなんて有り得ない
この人達は何を考えているのだろう
「私を雇うのは厄介だよ」
私はそう口に出していた。自分でも何故そんなことを言ったのか分からない
ルートは不思議そうな顔をした
「何故？」
当たり前の質問が返ってきてしまった
この人が本当に王子なのなら解決出来るかもしれないそうとっさに思った。
だから、いっそのこと打ち明けてみよう。なんの意味も無いかもしれないけど．．．
「私はアイリンの王子にもそう言われて．．．嫌で逃げてきたから．

・」

ルートはカインとシュラの方を向いた
驚いた顔をしていた

「あの能天気馬鹿な王子も術師が必要なのは分かっているんだな・・・」

まるで独り言のようだった
仮にも隣国の王子をそんなふうに言っていいのだろうか？

ルートは何か考えているようだった

その時、入り口のドアが勢い良く開いた

第二章

そこには、サンが颯爽と立っていた

カインとシュラはルートの前に立ちふさがった

あぁ、2人は護衛という訳なんだ・・・そう思った

「聖獣か・・・」
ルートがそう言ったとき

「アイリンの兵が来る。人数は3人だ」
サンはそう言いながら、私に近づいてきた
そして、ルート達を睨んだ

「シャイリスの殿下とやら、お前に何が出来る？この子は争いを望まぬぞ」

低い声が響いた
誇り高い獣の声だった

ルートはカインとシュラをよけ、サンに近づいた
全く恐れる様子がなかった

「私は、アイルに無理強いはしないと言いました。
だが、呪師は必要。先日私に仕えていた呪師の寿命が尽きた。
現在ではもう、呪師がいなければ、その国は滅びる。
私は今、アイルに出会いました。
私はアイルの力を借りたいと思っています」

ルートはサンの眼を見ながら答えた

サンは私の方を見た

「お前は、どうしたい？今なら私の背に乗ってアイリンの兵から逃れられる

どこにでも連れていってやろう

アイリンが諦めるまで私がついている

だが、このシャイリスの殿下を信用してみるのも１つの手だよ

お前がお決め」

サンは優しい口調で私に問いかけた

サンは私にルートは信用出来ると遠回しに言っている

いつまでもこのままじゃいけないということか・・・・

「ルートを信じてみようと思うよ・サン」

信じてみようと思った

最初はみんなと変わらない傲慢な人なのかと思った

だけどルートはとても綺麗な眼をしていた

それに・・・サンを恐れなかったから

サンはルートを見た

「シャイリスの殿下。この子を頼んだよ」

そう言うと静かに小屋を出て行った

思いも寄らない訪問者と訪問者からの助言で

小屋の中はしばらく沈黙してまった。

最初に口を開いたのはルートだった
「ありがとうアイル。よし、そうと決まればあの馬鹿王子と話しをつけないとな」
明るい口調。そして屈託のない笑顔を私に向けた。

・・・・・
ルートの印象が変わった。先ほどまでとは口調が全く違っている

「あぁ、気にしないでね、ルートは元々こういう人だから。あ、これからよろしくね。
俺のことはカインて呼んで」
カインとシュラが近づいてきた

「私はシェラ。よろしく」

カインはとても優しそうな人だった。
この中で一番背が高い

シェラはクールな人のようだ
でも口調は柔らかい

「カイン。アイリンとの交流はあまりなかったんだよな？」
ルートはソファーに座り直し今度は真剣な顔をしていた。
カインも笑顔を消し
「あぁ、アイリンとはあまり貿易が盛んじゃないからな」

こんな王族もいるのか・・・そんなことを今考えてしまった
護衛が敬語を使わないなんて・・・

「確か・・・アイリンには数人術師がいると聞いたが。
まだ術師を探しているのか」
「今は４人だと思う。王に２人、王子に２人ついていると聞いたことが」
ルートの質問にカインが答えていく
シャイリスにはそんなに術師がいないのだろうか？
そう思ったその時入り口のドアが強引に開いた
入って来たのは、アイリンの兵３人だった
「アイル殿一緒に来ていただきたい」
１番前にいる図体のでかい男がズカズカと入ってきた。
ルートはスッとソファーから立ち上がると
男の動きを止めるかのように男の前に歩み寄った
後ろには、カインとシュラがついていた
「誰だ？貴様。そこをどけ」
男は大声を上げた
ルートは怯む様子はなく
「ヨハン殿下と話がしたい。取りついでほしい」
そう言いながら、ルートは腰にさしていた小刀を男に突きつけた

綺麗な装飾がされた小刀だった。
男はその小刀を目にした瞬間ひざまずいた。
身体の大きさの割には身軽な動きだった
「ご無礼をいたしました。ハッ、直ちに」
男は他の2人を引き連れてそそくさと小屋を後にした
兵が馬に乗り去っていくのが見えた

「訓練されてる兵はお行儀がいいな」
ルートは皮肉を言うように言った
「どうでるんだか・・・」
シェラが外を見ながら呟いた

空は少し陰りを見せていた
雨は降らないだろう
日が隠れ私にとっては過ごしやすくなってきた
あと数時間で夜がくる

「大丈夫か?」
ルートが私の顔をのぞき込んでいた
みんなが私の近くにいた

私は思わず一歩後ろに下がった

この人はもう少し警戒心を持つべきだと思う

一国の王子が術師の眼を自ら見るなんてどうにかしている

「私が恐くないの？」

ルートは優しく微笑んだ

「人を見る目はあると自負しているからね。
俺はもうアイルを友人だと思っているよ」

なんと言っていいのか分からない
私の知らない世界に来ているようだ

友人か・・・

友人とは何だろう？
サンを友人と呼ぶのはおかしいだろうし、
他の聖獣達だって友人と言って良い関係にないと思う。
どちらかというと親のような存在だった。
闇の中にだって友人なんていなかったし・・・

意外なことに兵はすぐに戻ってきた

どうやら、ヨハン殿下はシャイリスとの国境近くに来ていたようだ

「よっぽどアイルがほしいようだな・・・話が早くすむといいが」

アイリンの所有する馬車の中でルートが呟いた。

日は沈んでいた。

これから国は闇に沈む

私が大好きな夜がきた

第三章

アイリン国に入った。
アイリン王族の、しかも殿下の所有する馬車だけあって、とてもすんなりと入国できた。

アイリンの術師とはどんな人だろう？
やはり光の者だろうか・・・

術師は2種類いる。
元々は1つの種族だったらしい。
だが、今は二つに分かれている
光と闇に・・・・

普通の術師は光
そして呪いを得意とするのが闇
いつどこでそんな風にわかれたのかは分からない。

今ではまるで違う種族になってしまっている
闇の方が圧倒的に人数が少ないが、力は闇の方が強い。

闇は人に仕えることなどめったにない
だから、国に仕える術師はほとんどが光の者だ。

馬車は、立派な屋敷の前で止まった。

無駄に整えられた屋敷だった
屋敷の門から2人の男がこちらに近づいてきた。

私たちは馬車から降りた。

2人の男はどちらも執事のような若い男で
燕尾服を思わせる服を着ている。

1人は・・・術師のようだ。
やはり・・光の者か。
私より年上のようだが、力は弱そうだった。

もう1人の男の方が話しかけてきた
「ようこそ・・お待ちしておりました。こちらへどうぞ」
男は深々をお辞儀をした。

術師は・・・・
震えていた
ルートへの挨拶もない

男が挨拶をするよう促しても
虚ろな目がキョロキョロと動くだけだった。
「おい、どうした？挨拶しないか・・・」

男が耳元でささやいた言葉が聞こえた

術師はこちらを・・・・
正確に言えば私を見た。

サッと視野から術師が消えた。

と思ったら、術師が顔を地面にこすりつけ土下座をしていた。
男は、術師に近寄り起こそうと腕を引っ張るが動こうとしない。
「何をしているんだ・・・ルート殿下にご無礼だぞ」
男は慌てていた。
だが、術師はそのままの体勢を続けた。

「どうしたんだ？」
ルートが小声でカインに言った。
「さぁ・・・」
カインも不思議そうな顔をしていた。

あぁ、この術師は私に怯えているのか・・・
術師は相変わらず動こうとしない。
私は、術師にそっと近寄った。
ヒッ・・・・
術師が発した最初の言葉は、私に対しての恐怖だった。
ほら、これが普通の反応なんだよ
「私は貴方に何かするわけじゃない・・・
顔を上げて・・・」
術師はやはり怯えた目で私を見た
私はモヤモヤとした何かで胸がいっぱいだった

「はい・・・ 申し訳ありませんでした」
術師は立ち上がりながら詫びた
その声は震えていた

ルートだけ別の部屋に通された
私とカインとシュラは、無駄に豪華なゴチャゴチャとした広間に通された

この屋敷を建てた人物の趣味はいったいどうなっているのだろうか・・・ と思わず考えてしまった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1088l/

闇の向こうの君へ

2010年10月8日21時50分発行